

受け入れ学級による転校児童への心理的支援の検討

－小学校時代の転校体験過程に着目して－

【研究目的】

本研究では、転校によって起こりうる問題やその要因、転校体験の意味づけを明らかにしながら、受け入れる側による転校生への心理的支援について検討することを目的とした。転校経験者が転校による環境の変化にどのような影響を受け、どのような心理過程を体験しているのかに着目し検討した。具体的には、1) 受け入れ学級の様子から受ける影響、2) 転校問題から考える転校生への支援、3) 転校経験に対する現在の意味づけ、の3点を検討した。

【研究方法】

研究の対象は、小学校高学年時に転校を経験した現在大学生の方とした。男性2名、女性1名の計3名の対象者に対し、30～60分程度で半構造化面接を行った。インタビュー内容は同意を頂いた上で録音し、逐語録を作成後、ナラティブ分析を行った。

【分析結果・考察】

1) より、受け入れ学級の様子が転校生の転校先での生活に大きく影響を与えることが明らかとなった。転校生は転校による環境移行に伴う大きな変化にネガティブな感情を抱いているということを受け入れ児童が理解し、積極的に話しかけに行くなど転校生に興味を示すことが、転校生にプラスの影響を与えると考える。

2) より、転校問題には主に人間関係と学業面での問題が挙げられ、教師・受け入れ児童による転校生への支援の中でも、特に教師による支援の有無が重要になることが明らかとなった。転校先に馴染みやすい環境作りをしてもらえることが転校生にとって安心へとつながり、転校先への適応のしやすさに関係するということが考えられる。

3) より、転校時の体験の辛さによって、転校をしたことにポジティブな影響を受けるのか、ネガティブな影響を受けるのかは異なってくるが、受け入れ児童が積極的かつ受容的な姿勢を転校生に対して示すことで、転校生の転校先での生活、また転校に対する意味づけがポジティブなものとなることが明らかとなった。

論文要旨

親友への援助要請における心理的プロセスに関する研究 －相談者の心理的負債感とサポートの効果の関係－

問題・目的

大学生は悩みを抱えた際に悩み事を相談する相手として、インフォーマルな援助者を好み、中でも友人を選ぶ人が多い。また、サポートが行われる関係性の親密さにサポートの効果は影響を受け、被援助者と親密な関係でない援助者からのサポートはネガティブな効果をもたらすという事が分かっている。友人とのソーシャルサポート研究や援助要請研究の調査は進んでいるものの、サポートが行われる両者の対人関係の親密性や葛藤の程度を考慮した質的研究は行われていない。こうした背景を踏まえて、親友という関係性における葛藤や気遣いを明らかにすることで、友人間のソーシャルサポート研究の普及や相談を受けた際の相談者への理解を深めるという点で意義がある。

研究方法

そこで、本研究では、被援助者と援助者の関係性を最も親しい同性友人に限定し、親友に相談をした女子大学生3名に30-60分程度のインタビュー調査を行った。インタビューの中では、サポートを求めた親友とはこれまでどのように関わってきたのかや、サポートを求める意思決定の際や相談中にはどのような葛藤があったのかに焦点を当て、親友への援助要請の中で生起する心理的負債感とサポートの効果の関係性を検討した。内容に関しては対象者本人の了承を得た上で録音した。インタビュー内容が逐語におこし、分析はナラティブ分析で行った。

分析結果・考察

親友への相談では、相談者は相談相手である親友に対して気遣いや申し訳無さを感じる事が示された。親友への相談において、心理的負債感は援助要請の意思決定に影響を与えず、また、心理的負債感を感じつつもサポートの効果をポジティブに認識している方が多かった。その理由として考えられるのは、相談によって相互理解が深まることにより、親友との関係性にプラスに作用することへの期待感を持っていたことや、これまでの関係性によって、親友に相談するとき配慮すべきことを実行できていたことが推測できた。特に、互いに必要な援助を提供しあうことを前向きに考える親友関係では、相談中の相談者の気分状態を緩和することが示唆され、心理的負担を軽減しながら悩みの解決に繋げることができること、関係性の深化や自己成長感にも影響をもたらすことが明らかとなった。

今後は、友人と関係を深めて親友という関係性を築いていくという過程に焦点を当てた研究を行い、心理的負債感とサポートの効果の関連を研究していくことで、現代青年の友人観の理解に寄与することができると思う。

【研究目的】

本研究では、ひきこもり者のきょうだいの語りから、きょうだいから見た同胞の理解や捉え方の変化プロセスを明らかにする。そして、彼らがどのような心理的葛藤を体験しているのか、また、彼らはそれらをどのように乗り越え、その過程でどのような支援を必要としているのかについて検討し、きょうだいへの支援の方向性を見出すことを目的とする。

【研究方法】

同胞がひきこもりになるという体験をしたきょうだいで、その時期に親と同胞と生活を共にしていた者を対象とする。インタビューは成人したきょうだいに行い、調査実施時に同胞のひきこもりは継続されていないこととする。3名の方にご協力いただき、事前に同意を得た上で、インタビューの内容を録音して逐語録を作成し、ナラティブ分析を行った。

【分析結果・考察】

ひきこもり者を同胞にもつきょうだいは、同胞と共に生活を送る中で、同胞に対してだけでなく家族や医師に対して様々な心理的葛藤や困難、悩みを抱えていたことが明らかになった。その一方で、同胞が引きこもりになった当初における、きょうだいの同胞のひきこもり状態に対する受け取り方については違いが見られた。それには、同胞のひきこもり開始時におけるきょうだいの年齢や同胞の病気(精神疾患)としての診断の有無、きょうだいのひきこもり状態に対する否定的評価の有無が影響していたと考えられる。

ひきこもり者を同胞にもつきょうだいに対する支援には、第一に、きょうだいがもつひきこもり状態に対する否定的評価を低めるような介入や経験者との交流の場を設け、ひきこもりや同胞のひきこもりに対する多様な見方や捉え方の拡大を図るといった「多様な見方・意味づけの提示で、柔軟な物事の理解・とらえ方を拡大する援助」が考えられる。また、第二に、きょうだいが家族内の問題から離れられるような環境や居場所をきょうだいに与えることや話し相手としての存在やきょうだいが自分の感情を表出出来る環境を与えてあげるといった、「適切な心理的距離を維持することへの援助」が考えられる。

大学生の挫折・失敗経験からの回復におけるレジリエンスについての検討

目的

本研究では、大学生の過去の挫折や失敗などの経験から立ち直った過程についての語りを通して、落ち込んでからレジリエンス能力が発揮され、回復に至るまでのプロセスについて明らかにすることを目的とする。

研究方法

さまざまな挫折から立ち直った経験をもつ大学生3名を対象とした。本研究は、対象者の個人的体験や、思いや考えをデータとして扱うため、インタビュー調査で行った。各インタビューの時間は30～60分程度であった。内容に関しては対象者本人の了承を得たうえで録音した。インタビュー内容は逐語に起こし、分析はナラティブ分析によって行った。

結果・考察

インタビュー対象者二人から精神的なダメージを受けやすい印象を受けた。精神的なダメージといっても、直接周りからネガティブなことを言われるわけではなく、二人とも「周りの人たちにこう思われていたらどうしよう」と人の気持ちを推測し、想像の中の言葉や気持ちに不安な気持ちを抱いていた。

インタビューから、立ち直る過程については、まずは頭の中でひたすら考え気持ちの整理をしてから、友達に相談をするというような共通の語りが見られた。人に相談するということは、出来事や自分の気持ちを少し離れたところからみて言語化しなければならないため辛いことだとすぐにはできないようであるが、ある程度気持ちが落ち着いたらできるという語りもあった。回復までのプロセスでは、緊急性に個人差はあったものの、対象者全員に共通して人に相談することをしてきた。人に相談するメリットとしては、気持ちを分かってもらえることや、気持ちが発散されること、新たな視点や解決策に出会えることが語られていた。

今回のインタビューでは、対象者の条件をあまり細かく設定していなかったために回答の幅が広がってしまった。もともとそこまで落ち込まない性格の人や段階的にというよりは、いろいろな方法を同時に試しながら回復に向かう人もおり、一概には結論づけられなかった。回復するまでのほかの方法には、ネットや本で関連する情報を収集することや好きなものに没頭することで気分転換をしたり、悩むことから気を紛らわせたりしているということがわかった。

適応指導教室でのボランティア体験が臨床心理士としての不登校児童生徒への支援に及ぼす影響 の検討

【研究目的】

本研究では、過去に適応指導教室での学生ボランティアに長期間参加していた臨床心理士の語りから、適応指導教室での学生ボランティアが活動を通してどのようなことを学び、それが臨床心理士としての不登校児童生徒への支援にどのような影響を与えるのかを明らかにすることを目的とした。具体的には、学生ボランティアにおける「児童生徒とのかかわり方」、「児童生徒への理解」、「自己理解」、の3つの学びについて明らかにし、それらをもとに長期間の学生ボランティア体験による学びとそれによる臨床心理士としての支援への影響を考察した。

【研究方法】

本研究では、適応指導教室での学生ボランティアにおいて、不登校児童生徒との1年以上の交流経験があり、現在不登校児童生徒への支援を行っている臨床心理士を研究対象者とし、対象者に対して半構造化面接を行った。3名の方にご協力いただき、事前に同意を得たうえでインタビュー内容を録音して逐語録を作成し、ナラティブ分析を行った。

【分析結果・考察】

本研究では、学生ボランティアが活動を通して「児童生徒とのかかわり方」、「児童生徒への理解」、「自己理解」、に関する様々な学びを得ており、それが臨床心理士としての専門的な支援に影響を与える可能性が示唆された。これに関して、まず、「児童生徒とのかかわり方」について、対象者は相手主体のかかわり方を学んでおり、このような学びは、指導的な場面や一对一の面接の場面などの、専門家としてのかかわり方に影響を与えると考えられる。次に、「児童生徒への理解」について、対象者は不登校の多様性や児童生徒の変化の過程を学んでおり、このような学びは、臨床心理士の専門業務である心理アセスメントに影響を与えると考えられる。さらに、「自己理解」について、対象者は自身の活動を振り返る際の視点や、自身の児童生徒とのかかわり方や学生ボランティアとして姿勢への理解を学んでおり、このような学びは、臨床心理士の専門業務であるコンサルテーションに影響を与えると考えられる。

また、本研究では、心理職養成課程としての長期のボランティア体験の重要性を示すことができた。具体的に、長期間の学生ボランティア体験が、先に挙げられた「児童生徒とのかかわり方」、「児童生徒への理解」、「自己理解」、の3つの学びに肯定的な影響を与える可能性が示唆された。

青年期における女性の化粧行為が自己概念に及ぼす影響

【目的】

現在、青年期の女性の化粧率が増加している。高坂・千葉(2015)は自己像を再構築していく青年期では、他者からの評価を含めた否定的な自己評価を行いやすく、自己を変えた気持ちを生み、青年女子は化粧行為へと駆り立てられると述べている。木戸(2009)によると化粧行為は表層的な変容のみではなく、心理的な変容を生じさせるといい、自己概念の形成に影響を及ぼすという。また竹原・野村(2004)は化粧行為の導入が青年女子にとって良い影響をもたらした場合、自尊心維持に結びつき、社会的適応状態をもたらすと述べている。よって本研究では①化粧を必要とする青年女子は化粧にどのような効用を感じるのか、②その効用は自己概念の形成にどのような影響を及ぼすのか、③自己概念の変容が青年期の課題であるアイデンティティの確立にどのような影響を及ぼすのか、という事を分析する。この分析から、青年女子にとっての化粧行為の意味を明らかにする。

【研究方法】

青年期である10代で化粧行為を日常的に始めていて、10代の時に化粧への関心が高かった、もしくは現在も関心が高い大学4年生の女性3名を対象とした。30-70分程度の半構造化面接を行い、内容は対象者本人の了承を事前に得た上で録音した。インタビュー内容を逐語におこし、ナラティブ分析を行った。

【結果・考察】

松井・山本・岩男(1983)が示した化粧の効用である、第1の効用「化粧行為自体がもつ効用」第2の効用「対人的効用」第3の効用「心の健康」が本研究でも確認できた。これらの効用を通じて、外見がより良くなる事を自覚した上で他者と関わり、他者からの良い反応や評価の実感がある事で、内面や精神状態に変化が現れ、自己概念に影響を及ぼすという事が分かった。化粧行為の影響を受けた自己概念が、その人がもつ全ての自己概念であるとはいえないが、肯定的な自己概念を構築するきっかけにはなっていた。その肯定的な自己概念は、アイデンティティの確立として「自分はこのままでいい」といった自己肯定感などに影響を及ぼす一要因になると考える。

よって顔を変化させる事で他者からの評価、認識を操作する事は、自己肯定感をあげる事に繋がるといえる。つまり青年女子にとって化粧行為は、他者に見せたい自己を分かりやすく表現する手段という意味をもつ事が明らかとなった。

知的障害の同胞をもつきょうだいへの支援の検討

【研究目的】

本研究では、知的障害の同胞をもつきょうだいに焦点を当て、きょうだいの現状や役割、きょうだいが抱える不安や葛藤、同胞の障害認識を明らかにし、きょうだいにとっての有効な支援について検討し、きょうだいが抱える問題を減らしていくことを目的とする。きょうだいは、親以上に同胞と長く家族であり続ける可能性が高いため、同胞の存在がきょうだいの人生に大きな影響を与えられられる。

【研究方法】

本研究では、1)知的障害のある同胞をもつきょうだいであること、2)大学生以上であること、3)女性のきょうだいであること、という条件を全て満たす方を対象に、所要時間50～70分程度の半構造化面接を行った。3名の方にご協力をいただき、事前に同意を得た上で、インタビューの内容を録音して逐語録を作成し、ナラティブ分析を行った。

【分析結果・考察】

3名の語りの中から、きょうだい支援には、①親の存在、②第三者の存在の影響、が関わっていることが明らかになった。①に関しては、母親がきょうだいに対して積極的・支持的な関わりを持っている場合、きょうだいは同胞に対して親和・受容的な関わりを持つようになり、母親の養育態度がきょうだいと同胞との関係に影響を与える可能性が示唆された。また、親には同胞のことを相談しにくいと語られた。②に関しては、3名に共通して親以外の誰かに支援されたという経験はないと語る。第三者に相談するという発想がなく、相談できる場所を知らなかったが、何かしらの支援はしてほしいと話している。専門家に話を聞いてもらうという支援や、同じ立場のきょうだいと話し合うという支援を、きょうだいたちは求めていた。つまり、自助グループの存在が必要であったと考えられる。

大学生・成人の時期に焦点を当てたきょうだい支援としては、身近にいる同じような立場のきょうだいと共有するということが挙げられる。自分だけが悩んでいるのではなく、自分と同じように悩んでいる人がいるということを知ることができ、今後困ったことがあれば相談できる仲間がいるという安心感が生まれる。そのため、大学生・成人の時期のきょうだいが、同胞のことをためらうことなく周りに話せるようになることが、きょうだいへの支援の第一歩になるのではないかと考えた。きょうだい支援には、きょうだいへの直接的な支援だけではなく、社会の障害に対する認識を変えていくことも重要である。

現代女子大学生が友人関係において有するやさしさ

【研究目的】

本研究では、現代女子大学生が友人との関わり合いにおいて、①お互いを傷つけあわないように気を配るやさしさをどのように用いており、②用いた場合には、どのような感情を持つか、③今の友人関係をどう思うか、を明らかにすることを目的とした。

【研究方法】

発達の適応的課題が注目されている青年期でも大学生を対象とした。大学生の中でも、男子より精神的つながりを重視するようなやさしさを用いる女子（今尾他，2019）を対象として、岡田（2012）の「友人から傷つけられることを回避する傾向及び友人を傷つけることを回避する傾向に特化した尺度」を用いた予備調査を行い、インタビューの許可を得られた得点上位者3名に30-60分程度のインタビューを行った。なお、岡田（2012）の尺度では、対象者の同性の友人との関わりについて質問していたため、これに倣い、本研究のインタビューにおいて話題となる対象者の友人も女子に限定した。傷つけあわないやさしさを用いる者が行動決定する背景にある心情、考え方についてナラティブ分析を行った。

【分析結果・考察】

本研究では、お互いを傷つけないように気を配る予防的なやさしさについて、①それぞれ友人における関わり方の差異への考慮、②予防的なやさしさへの認知的変化または浸透、③気疲れのないやさしい関わり合い、という視点から考察された。

①では、日常的に予防的なやさしさを用いやすいインタビュー対象者であっても、相手や場面によって様々なやさしさを使い分けていることを指摘した。友人の性格や友人との具体的な関係、友人との間に置かれた状況などによって、予防的なやさしさを用いやすくなったり、逆に用いにくくなったりすることが考えられた。

②では、インタビュー対象者全員が、予防的なやさしさを用いるのには自身の性格が関係していると述べたことに焦点を当てた。予防的なやさしさは対人技能としてというよりも、性格の一側面として認知されるようになったのか、予防的なやさしさが性格として分類されるほどに浸透している可能性が考えられた。

③では、先行研究と異なり、インタビュー対象者全員が友人関係において疲労を感じていないことに着目した。予防的なやさしさ、気遣いのある関係であっても、話題に共感できたり、友人との距離が安定していたりすれば気疲れを感じにくいことが考えられた。